

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 10 日現在

機関番号：24402

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17H02302

研究課題名(和文)日本の地域素人演劇の包括的研究

研究課題名(英文)A nationwide research project of regional amateur theatre in Japan

研究代表者

小田中 章浩(Odanaka, Akihiro)

大阪市立大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：70224251

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,550,000円

研究成果の概要(和文)：地域の市民による営利を目的としない演劇活動は、20世紀末から新たな展開を見せている。本研究は、こうしたアマチュアによる新しい演劇活動を学問的な研究対象とし、そこからいくつの特徴的な傾向を明らかにすることに成功した。その一つは、これら「新しい」アマチュア演劇における市民参加の度合いが、以前と比べて決定的に増していることである。それは、地方創生、あるいはそれに連動した「町おこし」の動きと関係しているが、それだけにとどまらない。また「新しい」アマチュア演劇は、「古い」アマチュア演劇に見られた思想的あるいは制度的な拘束を逃れており、結果として自由かつ多様な表現が認められることが確認できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の最大の学術的意義は、現代日本におけるアマチュア演劇の様相を、包括的に可視化したことである。本研究によって、プロフェッショナルな舞台に注目するだけでは見ることのなかった、今日の演劇の多様なあり方が明らかにされただけでなく、草の根において演劇を支える人々の数が、演劇の専門家が考える以上に多いことが示唆された。このことは、「人はなぜ演劇をするのか」という演劇学の根源的な問いに関わるものである。さらに研究成果の一部が研究期間内に刊行されたことにより、本研究の意義を社会的に発信することができた。

研究成果の概要(英文)：Non-profit theatre activities supported by local residents have developed significantly in Japan since the late 20th century. The present study, which focalizes on these “new” amateur theatres as a subject of academic research, succeeded in elucidating their distinctive traits. One major finding was that resident participation has definitively increased compared to “old” amateur theatres. This is related to the regional and town revitalization efforts instituted over the last century but its scope goes beyond such political motives. Moreover, “new” amateur theatres are bound neither by ideological nor institutional constraints, thereby leading to more free and diverse productions.

研究分野：演劇学

キーワード：演劇学 アマチュア演劇 コミュニティ・シアター 素人演劇 地域市民演劇 民衆演劇 民俗芸能

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

市民による営利を目的としない演劇活動、いわゆるアマチュア演劇に関する調査・研究は、本研究が行われるまで、完全に時代から取り残されていたと言ってもよい。その最大の理由は、アマチュア演劇概念が古いモデルにとらわれていたことである。すなわち、それは第二次大戦後のわが国における文化の民主化運動—その多くは左翼思想と連動するものであった—に基づいており、そこでは文化の指導者としての知識人（劇作家、演出家）と、その指導の下に演劇活動を行う民衆という図式が暗黙のうちに合意されていた。さらにそこでは、伝統文化（民俗芸能）と現代演劇との接合も必ずしもうまく行かなかった。しかし現実には、わが国においては20世紀末頃から、こうした文脈とはまったく別のところで、新しいアマチュア演劇活動が全国至るところで展開されていた。これが本研究を開始した背景である。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、現代日本で行われているアマチュア演劇の実態について調査し、従来とは異なった視点から演劇の理解を深めることである。より具体的には、これまでの「アマチュア演劇」の理解、すなわち第二次大戦前から一部の知識人の中で唱えられていた民衆（国民）演劇の理念に、戦後のアメリカ的なコミュニティ・シアター概念が混じり合ったものとしての「アマチュア演劇」の概念から外れたところで、いわば自然発生的に誕生し、実践されている各地の素人演劇についてその特徴を把握し、さらにそこから現代において（さえ）人々が演劇に魅せられる理由は何かを探ることである。

## 3. 研究の方法

本研究は、地域のアマチュア演劇の現地調査（観劇ならびに関係者へのインタビュー）と研究分担者ならびに協力者による調査報告、さらにそれらを整理し、より包括的な視点を得るための研究集会の開催によって行われた。ただしここでいう「地域」とは、都市と対比的に用いられる地方を指すのではなく、アマチュアによる演劇活動が行われている場所という意味である。さらに日本全国で行われている地域素人演劇を網羅的に調査することは不可能であるため、現代日本のアマチュア演劇の様相を考えるうえで示唆的と思われるいくつかの事例に焦点を絞り、それらを継続的に調査した（少なくとも2回の現地調査を行った）。また調査の客観性を担保するため、調査は研究代表者・分担者および（または研究協力者）がペアを組んで行うこととした。

調査対象とした演劇活動は多岐にわたったが、結果としてそれらは以下の四つに収斂したと考える。(1)市民による伝統芸能の再創造、(2) コミュニティ・シアター概念の拡張、(3)「発表会」（お稽古事）文化の延長線上にある素人演劇、(4)社会包摂的な素人演劇。

## 4. 研究成果

(1) 2017年度は、研究代表者・分担者および研究協力者（以下「研究メンバー」と略す）が合計12回の現地調査を行い、3回の研究集会を開催した。また、2017年度日本演劇学会研究集会（2017年11月、愛媛大学城北キャンパス）において「素人演劇の身体性」と題されたパネルセッションが生まれ、4名の研究メンバーが発表を行った。(2) 2018年度は合計15件の現地調査を行い、2回の研究集会を開催した。また2018年度日本演劇学会全国大会（2018年7月、神戸松蔭女子大学）において「文化現象としての地域（素人）演劇の可能性」と題したシンポジウムを開催し、3名の研究メンバーが発表を行った。さらに同年7月にセルビアのベオグラード大学で行われた国際演劇学会（IFTR: International Federation for Theatre Research）において2名の研究メンバーが発表を行った。(3) 2019年度は合計33件の現地調査を行い、2回の研究集会を開催した。中でも6月に成蹊大学で行われた研究集会は一般公開され、ユニークな学習塾、赤門塾が行っている演劇祭を記録したドキュメンタリー映画『ぼくたちのハムレットができるまで』の上映会が行われ、上映後、塾の主催者である哲学者、長谷川宏氏を交えた関係者の座談会が行われた。さらに2019年度日本演劇学会研究集会（2019年10月、岩手県西和賀町文化創造館「銀河ホール」）において、「地域演劇の新しい動き」と題されたパネルセッションを行い、4名の研究メンバーが発表を行った。(4) 研究の最終年度である2020年度は、コロナ禍のために現地調査の多くを断念せざるを得ず、結果として研究期間を2021年9月まで延長した。この間、4回の現地調査を行い、研究集会を2回開催した。ただし研究集会はすべてオンラインで行われ、現地調査後の当事者へのインタビューの一部もオンライン形式で行われた。同時にこれまでの調査ならびに研究の主な成果をまとめる作業を進め、2022年3月に森話社から『「地域市民演劇」の現在』を刊行した。

上記「研究の方法」で提示した地域素人演劇の四つのカテゴリー、すなわち(1)市民による伝統芸能の再創造、(2)コミュニティ・シアター概念の拡張、(3)「発表会」(お稽古事)文化の延長線上にある素人演劇、(4)社会包摂的な素人演劇は、相互に浸透しており、個別の事例がそのなかの一つだけを代表することは、まずないと言ってよい。ただしあえてこれらを整理し、本研究によって明らかになったことの概要を述べれば、以下ようになる。

まず(1)市民による伝統芸能の再創造に関しては、「古い」アマチュア演劇(1970年代以前)の提唱者たちが伝統芸能を旧弊なものとして排除する傾向にあり、結果として同時代のアマチュア演劇との接点が失われていたのに対して、本研究では伝統演劇の現代化をコミュニティ再生への肯定的な動きとして捉え、評価した。すなわち、これまでまっぴら民俗芸能研究の枠組みの中で論じられてきた、(ネガティブな面を含めた)伝統芸能の伝承のあり方の問題は、地域素人演劇という視点を導入することにより、コミュニティ創生という観点から、より発展的に論じることが可能となった。たとえば沖縄の「現代版組踊」について「パブリック・ヒストリー」(民衆の「中から」生まれる歴史)という視点から論じた本橋哲也(研究分担者)の研究や、農村の素人演劇について論じた畑中小百合(研究協力者)あるいは地芝居(素人歌舞伎に)を論じた館野太朗(研究協力者)の研究がこれに該当する。(2)コミュニティ・シアター概念の拡張については、最近日本各地で盛んに上演されている市民ミュージカルを取り上げた日比野啓(研究分担者)の研究が代表的なものである。市民ミュージカルは、正統的な演劇学はもちろんのこと、アマチュア演劇研究という文脈においても、これまでまったく注目されなかった演劇ジャンルであるが、それは地域コミュニティの新たな創造、発展のために無視できない役割を果たしている。これとは大きく色合いが異なるが、片山幹生(研究協力者)が注目した、学習塾が母体となって行われる「赤門塾演劇祭」も、その参加者が塾の在校生だけに限られず、今後あり得べきものとしての、緩やかな共同体の形成を示唆しているという意味において、このカテゴリーの中にも含めることができるだろう。(3)「発表会」(お稽古事)文化の延長線上にある素人演劇としては、鈴木理映子(研究協力者)が論じている、全国でいくつか行われている「宝塚風ミュージカル」や、館野太朗が取り上げた、女子校のOBが行う「女子校ミュージカル」がある。これらの根底にあるのは「本物」に扮してみたいという願望であるが、かといって「本物」への劣等感があるわけではない。むしろそれは、日本で近代以前から行われてきた「お稽古事」(その現代バージョンが「発表会」という、特異な文化から発したものと考えるべきであろう(日比野が指摘するように、こうした側面は「市民ミュージカル」にも見られる)。最後に、(4)社会包摂的な素人演劇としては、介護を要するような高齢者を含めた、高齢者による素人演劇活動について論じた五島朋子(研究分担者)の事例や、大阪市西成区の通称釜ヶ崎で社会的弱者が行っている紙芝居劇団を取り上げた中川真(研究分担者)の研究がある。もちろんこれらが、(2)コミュニティ・シアター概念の拡張とも結びついていることは言うまでもない。

最後に小田中章浩(研究代表者)は上記研究を統括するとともに、特に(2)コミュニティ・シアター概念に関連して、鳥根県松江市の劇団「あしづえ」の活動を定点観測した。「あしづえ」は「古い」アマチュア演劇の枠組みからスタートしながらそれを脱し、日本において新しいコミュニティ・シアターのスタイルを作り上げた代表的な事例である。しかし「あしづえ」を論じるうえで大きな問題となったのは、地域の演劇活動においてプロとアマという区別を立てることへの疑問であった。演劇における「プロ」とはどのような存在なのか。逆にアマチュアとは何を意味するのであろうか。地域の演劇を支える「市民」=アマチュアであるという無意識の前提は正しいのであろうか。今回の研究が残した将来への課題は、地域「素人」演劇という括りそのものを取り外し、「地域演劇」というより幅広い視点から考察を行うことである。

もう一つの課題は、今回の研究ではとかくネガティブに取り上げがちであった(それは研究の対立軸の構成という点でやむを得ない面があったのだが)「古い」アマチュア(地域)演劇と、「新しい」アマチュア(地域)演劇との接合、連続性について考える必要性である。

今回の研究による研究成果と相前後して、われわれが「古い」アマチュア(地域)演劇と呼ぶものについて、新たな学問的成果が現れた。一つは小川史『一九四〇年代素人演劇史論 表現活動の教育的意義』(2021)、もう一つは須川渡『戦後日本のコミュニティ・シアター 特別でない「私たち」の演劇』(2021)である。今後、本研究を含め、これらを総合する形で、日本の地域演劇に関する研究が進展することが期待される。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 中川真	4. 巻 23
2. 論文標題 大きな力と対峙するアーツマネジメント	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 空間・社会・地理思想	6. 最初と最後の頁 207-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 五島朋子	4. 巻 17-18
2. 論文標題 創造集団が運営する劇場と地域住民の関係構築に関する考察－住民を対象とした質問紙調査をもとに－	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 アーツマネジメント研究	6. 最初と最後の頁 88-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小田中章浩	4. 巻 1
2. 論文標題 地域演劇との絆を作るために：「あしづえ」と「森の演劇祭」との関わりから	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 文化資源学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 3-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24544/ocu.20220325-010	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 Shin Nakagawa
2. 発表標題 Reexamination of traditional performing arts as a key cultural resource for sustainable community; beyond dichotomy of urban vs. rural
3. 学会等名 ICTM World Congress in Thailand, Chulalongkorn University, Bangkok (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shin Nakagawa
2. 発表標題 Bon Odori : The most loved Japanese folk performing art
3. 学会等名 National Museum for Visual Arts, Montevideo Uruguay (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shin Nakagawa
2. 発表標題 Socially Engaged Arts Management and Community
3. 学会等名 The 14th International Conference of Asian Arts Management in Cambodia, Siem Reap (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 五島朋子
2. 発表標題 超高齢社会における素人演劇の可能性：シニア演劇を事例として
3. 学会等名 地域市民演劇科研グループ公開研究集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 本橋哲也
2. 発表標題 函館野外劇と文化的アイデンティティ
3. 学会等名 地域市民演劇科研グループ公開研究集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中川眞
2. 発表標題 紙芝居劇団『むすび』の挑戦
3. 学会等名 地域市民演劇科研グループ公開研究集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 日比野啓、本橋哲也、館野太朗、畑中小百合
2. 発表標題 地域演劇の新しい動き 伝統芸能と市民演劇のあわい
3. 学会等名 日本演劇学会 研究集会「演劇と風土」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kei Hibino
2. 発表標題 Theatre That Holds the Self-Reflective Mirror up to Nature: Japanese Local Amateur Theatre Reconsidered
3. 学会等名 IFTR World Congress Belgrade 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tomoko Goto
2. 発表標題 Potentials of Amateur Theatre Production in Super Aging Society: A Case Study on Theatre Activities by the Elderly
3. 学会等名 IFTR World Congress Belgrade 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 本橋哲也
2. 発表標題 文化現象としての地域（素人）演劇の可能性
3. 学会等名 2018年度日本演劇学会全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 五島朋子
2. 発表標題 文化現象としての地域（素人）演劇の可能性
3. 学会等名 2018年度日本演劇学会全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木理映子
2. 発表標題 文化現象としての地域（素人）演劇の可能性
3. 学会等名 2018年度日本演劇学会全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 日比野啓、片山幹生、畑中小百合、館野太朗
2. 発表標題 素人演劇の身体性
3. 学会等名 日本演劇学会研究集会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 日比野啓、本橋哲也、鈴木理映子、館野太郎、片山幹生、畑中小百合、五島朋子、中川 真	4. 発行年 2022年
2. 出版社 森話社	5. 総ページ数 288
3. 書名 「地域市民演劇」の現在	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	本橋 哲也 (Motohashi Testuya)  (20230047)	東京経済大学・コミュニケーション学部・教授  (32649)	
研究分担者	中川 眞 (Nakagawa Shin)  (40135637)	大阪市立大学・都市研究プラザ・特任教授  (24402)	
研究分担者	日比野 啓 (Hibino Kei)  (40302830)	成蹊大学・文学部・教授  (32629)	
研究分担者	五島 朋子 (Goto Tomoko)  (80403369)	鳥取大学・地域学部・教授  (15101)	
研究分担者	館野 太郎 (Tachino Taro)  (00803941)	大阪市立大学・大学院文学研究科・研究員  (24402)	



6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	畑中 小百合  (Hatanaka Sayuri)		
研究協力者	片山 幹生  (Katayama Mikio)		
研究協力者	鈴木 理映子  (Suzuki Rieko)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関